高齢者の役割見直しに基づく社会参加促進プログラムの長期的効果

佐藤 美由紀

神奈川工科大学看護学部 准教授

(助成時:人間総合科学大学保健医療学部看護学科 助教)

スライド 1

於:千代田放送会館(永田町) 2016年12月3日、第23回ファイザーヘルスリサーチフォーラム

高齢者の役割見直しに基づく 社会参加促進プログラムの長期的効果

人間総合科学大学 保健医療学部 佐藤美由紀 (現 神奈川工科大学看護学部) 共同研究者

桜美林大学大学院老年学研究科 教授 芳賀 博 東洋大学ライフデザイン学部 教授 斉藤恭平

スライド 2

背 景

- ・健康日本21(第2次)では、社会参加の促進が 高齢期の健康目標として掲げられている。
- 「役割の喪失」が、高齢者の社会参加を妨げる 要因となっている。
- 2005年に北海道 I 町において、住民との話し合いを通じて地域社会における高齢者の役割を見直し、その役割を実践することにより高齢者の社会参加促進を目的としたプログラムをアクションリサーチにより実施した。

【スライド1】

このたびは本研究にご支援をいただき、ありがとうございました。

【スライド2】

社会参加は、高齢者の心身の健康、QOL、生命予後に効果があり、健康日本21では社会参加の促進が高齢期の健康目標として掲げられています。しかし、職業役割の喪失等、役割の喪失が高齢者の社会参加を妨げる要因となっています。

そこで私たちは、2005年に北海道I町において、住民との話し合いを通じて地域社会における高齢者の役割を見直し、その役割を実践することによる高齢者の社会参加促進を目的としたプログラムをアクションリ

サーチにより実施しました。

【スライド3】

アクションリサーチは、健康問題 の発掘・共有から、研究の全過程を通 じて研究者も現場に入り、その現場の 人たちと一緒に研究に参加します。

地域社会の文脈の中での活動をと おして知識の生成をし、地域社会の 問題の解決を図る研究です。

スライド3

アクションリサーチの特徴

(Greenwood, 2006)

- ・健康問題の発掘・共有から研究の全過程を 通じて、研究者も現場に入り、その現場の人 たちと一緒に研究に参加する
- 地域社会の文脈の中での活動をとおして 知識の生成をし、地域社会の問題解決をは かる

平山消義監訳、質的研究ハンドブック1巻 質的研究のパラダイムと眺望、63-85、北大路書房(2006).

【スライド4】

本研究は、北海道の南西部に位置する人口6,600人、高齢化率29.3パーセントの農村であるI町のY地区とN地区を対象に行いました。

Y地区とN地区ともに市街地にあり、Y地区は公務員等の退職者が多く、N地区は町営住宅が町内で一番多い地区になっています。Y地区の人口は、2005年当時は624人、高齢化率が25パーセント、N地区は2005年の人口が382人、高齢化率が25.4パーセントという状況でした。

スライド 4



【スライド5】

2005年に、地域社会における高齢者の役割を見直した結果、Y地区、N地区ともに地域活動が新たに創出されました。

両地区ともに住民主体により活動が10年間継続されています。

本研究の目的は、住民による主体的な地域活動が10年間継続された効果を検証することです。

【スライド6】

本研究のアウトラインです。

2005年に初回調査を実施して、その後、Y地区、N地区の両地区において、高齢者の役割の見直しを目的としたワークショップを実施しました。

【スライド7】

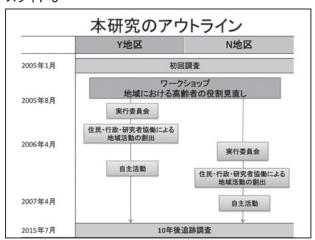
ワークショップは全住民に呼び掛け、各地区ごとに2回実施しました。地域の課題や、 住民みんなで実施すると楽しいこと等を話し合いました。その後、住民、行政、研究者で

スライド 5

背景•目的(2)

- 地域社会における高齢者の役割を見直した 結果、Y地区、N地区ともに**地域活動が創出**された。
- ・ 両地区ともに住民主体により活動が10年間 継続されている。
- 本研究の目的は、住民による主体的な地域 活動が10年間継続された効果を検証すること である。

スライド 6



スライド 7

ワークショップ 地域社会における高齢者の役割の見直し

- Y地区とN地区で各2回実施
- 地域住民を対象



地域の課題 ・1人暮らし高齢者の増加 近隣関係の希薄化など

住民みんなで実施すると 楽しいこと

- 特技をみんなで学びあう
- ·美化活動 ·そば打ちなど

スライド8

地域活動の創出

又批V

2 美術

体育

音楽

住民相互の学習事業

開講式

コーラス

家庭科 手打ちうどんつくり!

閉識式

アレンジメントフラワー

N地区

• 交流事業と美化活動



κさん

κさん



Y地区:学習事業 そば打ち





実行員会を立ち上げ、実践のための具体策を協議しました。

【スライド8】

その結果、Y地区では住民同士が互いの趣味や特技を学び合う住民相互の学習事業、N 地区では交流事業と美化活動が創出され、現在まで主体的に活動が継続されています。

2005年当初のプログラムがスライドのような状況になっていまして、地区のクリスマスリース

作りの得意な方が住民の皆さんに教えた り、そば打ちの得意な方が地区の住民の 方に教えて学び合うということをY地区 では行っています。N地区は交流事業と メイン道路の美化活動をいたしました。

【スライド9】

方法です。

初回調査は、2005年にY地区とN地 区に居住している65歳以上全員を対象 とし、郵送留め置き法による自記式質 問紙調査を実施しました。回収率は95.2 パーセント、199名から回収しました。

追跡調査は2015年7月に実施しまし た。初回調査に回答した113名を対象に 実施して、112名から回収をしています。

【スライド10】

調査項目は、基本属性、地域活動、 ボランティア活動の参加数、友人数、活 動能力として老研式活動能力指標、精 神的健康としてGDS15を聞きました。

スライド 9

方 法(1)

• 対

2005年にY地区とN地区に居住している 65歳以上全員

調査方法:

郵送留め置き法による自記式質問紙調査

*初回調査:2005年1月に実施

199人から回収(回収率95.2%) (Y地区120人、N地区79人)

*追跡調査:2015年7月に実施

112人から回収(回収率99.0%) (Y地区60人、N地区52人)

スライド 10

方 法(2)

- 調査項目:
 - *基本属性(年齡、性別、世帯等)
 - * 社会活動(地域活動、ホランティア活動);得点が高いと良好
 - * 友人数
 - *活動能力(老研式活動能力指標); 得点が高いと良好
 - *精神的健康(GDS15);得点が低いと良好
- 統計解析:
 - * 分析対象は、初回と追跡調査両方に回答した112人
 - * 創出された地域活動の参加群と非参加群とに分け、 **反復測定分散分析**を実施
- 倫理的配慮:

神奈川工科大学倫理審査委員会にて承認

創出された地域活動の参加群と非 参加群とに分け、反復測定分散分析 を実施しました。

【スライド11】

結果です。

Y地区では学習事業が交流事業に変更となり、さらに手芸教室、踊りの会、マージャン交流会等の3つの部会が誕生していました。

2015年には119回、延べ1,591人が参加しています。

【スライド12】

調査回答者60人中、交流事業に「よく参加する」、「ときどき参加する」の参加群は31.7パーセントの19人、「以前参加していた」および「参加したことがない」の非参加群は41名でした。

【スライド13】

初回調査では、非参加群と比較して参加群では年齢が低く、単身世帯が少ない状況でした。

スライド 11

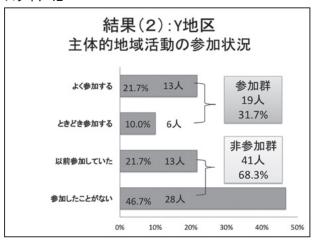
結果:Y地区(1) 2015年の活動状況

- 自治会事業として実施
- 自治会の保健福祉部が企画・運営
- 学習事業から交流事業に変更
- ・ 全体会の他、3つの部会が誕生

2015年の活動実績

	全体会	手芸 教室	おどり の会	麻雀 交流会	運営 会議	合計
回数	12	43	44	9	11	119
参加 人数	291	402	684	125	89	1,591

スライド 12



【スライド14】

初回調査時の年齢、性別、世帯、職業、各項目の初回値を共変量とした反復測定分散分析を実施した結果、交互作用が有意だったのは地域活動、ボランティア活動、活動能力、精神的健康でした。

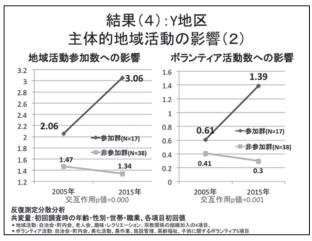
スライド 13

結果(3):Y地区 初回調査時の特性 参加群 非参加群 p値 年齡(平均) 67.79±2.12↓ 71.41±5.90 0.012 性別(男性) 9 (47.4) 20 (48.8) n.s 世帯構成 0 (0) 9 (23.7) 0.024 (単身) 13 (68.4) 34 (82.9) 職業(なし) n.s 手段的自立 4.84±0.37 4.78±0.62 n.s χ2検定またはt検定

スライド 14

Ė		果(4): 也域活動		图(1)	
	参加	11群	非参加群		交互作用
	初回	10年後追跡	初回	10年後追跡	p値
地域活動 (0-4)	2.06±0.66	3.06±0.90↑	1.47±1.03	1.34±0.88↓	0.000
ポランティア活動 (0-6)	0.61±0.92	1.39±1.46↑	0.41±0.69	$0.30\!\pm\!0.52\downarrow$	0.001
友人数	2.38±1.93	3.56±2.92	3.24±1.87	2.97±2.44	0.543
活動能力 (0-13)	12.06±1.30	12.41±0.87 ↑	12.06±1.53	10.03±3.40↓	0.043
精神的健康 (0-15)	3.47±3.43	2.47±2.00↑	4.43±3.11	6.29±4.08↓	0.002

スライド 15



【スライド15】

こちらが結果をグラフに示したも のになります。

濃い線が参加群、薄い線が非参加群となっています。左が地域活動の参加数、右がボランティア活動の参加数になっています。

いずれも参加群では参加数が向上 し、非参加群では参加数が低下してい るという状況になっています。

【スライド16】

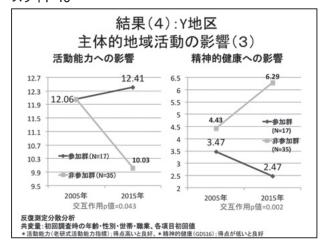
こちらは活動能力と精神的健康ですが、濃い線が参加群、薄い線が非参加群です。精神的健康は、得点が低いほど良好な状態を示しています。いずれも参加群のほうが向上、非参加群で低下しているという状況でした。

【スライド17】

N地区の状況です。

N地区では、美化活動は中断、交流 事業が自治会活動として位置付けられ、2015年には10回、241名が参加

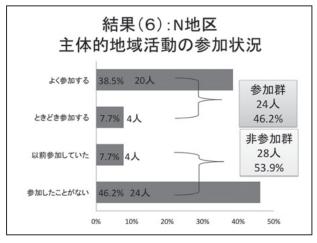
スライド 16



スライド 17



スライド 18



していました。活動内容はレクリエーションや季節の行事等になっています。

【スライド18】

調査回答者52名中、交流事業に参加している参加群は46.2パーセントの24名、非参加

スライド 19

結果(7):N地区 初回調査時の特性

	参加群	非参加群	p値
年齢(平均)	72.58±4.78	70.38 ± 4.55	0.092
<u>性別(男性)</u>	6(25.0) ↓	16(57.1)	0.019
世帯構成 (単身)	3(13.6)	1(4.2)	0.255
職業(なし)	4(16.7)	5(17.9)	0.910
手段的自立	4.88±0.61	4.85±0.46	0.878

χ2検定またはt検定

群は28名でした。

【スライド19】

初回調査では、非参加群と比較し て参加群では男性が少ないという状 況でした。

【スライド20】

初回調査時の年齢、性別、世帯、 職業の各項目の初回値を共変量とし た反復測定分散分析を実施した結果、 交互作用が有意だったのは地域活動 のみでした。

【スライド21】

結果をグラフで示したものです。

濃い線が参加群、薄い線が非参加 群です。地域活動の参加数は、参加 群で向上し、非参加群で低下してい ます。活動能力は、交互作用は有意 ではありませんでしたが、参加群で は機能低下の抑制傾向が見られまし た。

スライド 20

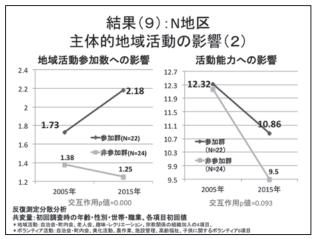
結果(8):N地区 主体的地域活動の影響(1)

	参加群		非参加群		交互作用
	初回	10年後追跡	初回	10年後追跡	p値
地域活動 (0-4)	1.73±0.88	2.18±0.96 ↑	1.38±1.01	1.25±0.74↓	0.000
ポランティア活動 (0-6)	1.48±1.12	0.90±1.45	0.83±0.76	0.25±0.68	0.122
友人数	3.32±2.48	2.86±1.83	3.87±3.88	2.70±3.21	0.809
活動能力 (0-13)	12.32±1.39	10.86±2.59	12.17±1.01	9.50±3.49	0.093
精神的健康 (0-15)	4.62±4.35	4.52±3.96	4.45±3.51	6.86±3.27	0.145

反復測定分散分析

及復測足方取の切け 共変量: 初回調査時の年齢・性別・世帯・職業、各項目初回値、 * 地球活動: 自治会・司内会、老人会、農味・レクリエーション、宗教原係の組織加入の4項目、 * ボランティア活動: 自治会・司内会、美化活動、農作業、施設管理、高齢福祉、子供に関するボランティア6項目

スライド 21



スライド 22

結 論

- アクションリサーチにより住民との話し合いを 通じて地域社会における高齢者の役割を見 直した結果、創出された地域活動は、住民 -一ズに応じて活動内容を変更させながら 住民主体により長期間継続される可能性が 高いことが示唆された。
- ・ 住民主体による地域活動が10年間継続され た効果として、社会参加の向上、心身の健康 増進の向上に寄与することが示唆された。
- 地域活動の開催回数や活動内容により、効 果に差がみられることが推察された。

【スライド22】

結論です。

アクションリサーチにより、住民との話し合いを通じて地域社会における高齢者の役割 を見直した結果、創出された地域活動は、住民ニーズに応じて活動内容を柔軟に変更させ

ながら、住民主体により長期間継続される可能性が高いことが示唆されました。

住民主体による地域活動が10年間継続された効果として、社会参加の向上、心身の健康 増進の向上に寄与することが示唆されました。

地域活動の開催回数や活動内容により、効果に差が見られることが推察されました。

質疑応答

会場: やはり高齢者をどうやって社会的な事業に参加させるかという、そこが問題だと思うのです。参加する人はずっと参加するのだけれども、参加しない人はずっと参加しない、あるいは、参加していたのだけどやめてしまって、もう参加しないという方に分かれるという結果だったと思いますが、参加しない人たちをどのように参加させるようにする工夫がなされたのかについては、どう解釈されているのでしょうか。

佐藤: まず一つは、この研究自体、アクションリサーチで地域活動を創出するところから住民の方々と話し合いながら進めております。従来の介入研究ですと、研究者側が効果がありそうな活動を設定して参加してもらう形になるのですが、今回の研究は住民の方々が参加したい活動を自分達で立ち上げて実施しましたので、従来の介入方法に比べて、住民の参加意欲が上がっていくと思っています。あと、Y地区、N地区とも、自治会活動として位置付けられましたので、自治会を通じて毎回回覧を出していたり、通信等を住民の方々が自分たちで作って発行

しています。Y地区では、各班に担当の実行委員さん方がいまして、その人たち

が各世帯に声掛けをして、参加を呼び掛けています。